

セッションC「ヨーロッパ啓蒙期の歴史叙述」

世話人：小谷英生（群馬大学）・網谷壮介（東京大学学術研究員）

報告者：上村剛（東京大学大学院博士課程・日本学術振興会特別研究員）・淵田仁（日本学術振興会特別研究員）

討論者：網谷壮介・上野大樹（一橋大学）

参加者数：40名程度

本セッションの世話人・報告者・討論者は、啓蒙期の歴史叙述の国際比較をテーマとした研究会を組織し、2015年度より活動を続けてきた。本研究会では、研究の導きの糸として、啓蒙期において歴史を叙述するということはどのような言語行為でありえたかのかという問いが共有されている。そのため、歴史叙述の内容もさることながら、その叙述を可能にした方法論、叙述の中で用いられるレトリック、叙述が読者に与えようとした政治的効果といった点にも着目して、研究が進められている。政治的効果の中でも、とりわけネイション意識やナショナリズムの萌芽に関連する事象への着目に力点がある。すなわち、18世紀末に向かうにつれて浮上しつつあったネイション意識の萌芽が、啓蒙期歴史叙述の中に見いだせるのではないかという作業仮説が共有されている。他国を鏡として自国の同一性を確認するという作業を含む傾向にあった啓蒙期の歴史叙述であればこそ、19世紀に浮上したとされるネイション意識やナショナリズムの萌芽を跡づけることが可能なのではないか。本セッションは、こうした研究の途中経過にあるものである。

第一報告者淵田氏は「ルソーにおける歴史の語りの検討」と題して、モミリアーノ、ポーコックらが検討してきた歴史叙述研究において見過ごされてきた〈ミクロな歴史叙述の方法〉に着目し、ルソーのテキストを読解した。〈歴史的テーマが何であるか〉ではなく〈いかに歴史の流れを記述するか〉という形式論・文体論に着目することで、新しい歴史叙述研究が開かれるというのが淵田氏の主張であった。とりわけ、ルソーはこの微細な歴史叙述に専心していた。『人間不平等起源論』からは、所有の起源、言語の起源といった起源論を因果論とは別なる形式で叙述しようとしていることが読み取れる。以上のことから、いかに語るかという叙述的問題が啓蒙期の歴史叙述において重要であることを示した。

淵田氏に対しては、討論者である網谷氏が三点の疑問を提起した。第一に、『不平等起源論』における哲学的推論はなんのために行われているのか。ルソーは「出来事の真実らしさを埋め合わせる」と述べているが、資料を欠くために記述できない歴史であれば、記述すべきではないのではないか。にもかかわらず「真実らしさを埋め合わせる」必要があるとすれば、そうした歴史叙述の目的とは何なのか。第二に、『不平等起源論』はどのような読者を想定し、どのような効果を狙って書かれているのか。実際、『エミール』第四編での歴史論に見られるように、ルソーは歴史叙述が読者に与える効果について、極めて注意深かった。第三に、淵田氏の着目する哲学的歴史の語りという点で類型化を試みるなら、

フランス啓蒙の歴史叙述の中にどのような類別が可能であり、またルソーを含めてどのような見取り図が描けるだろうか。

これに対して淵田氏は、まず啓蒙期において歴史と哲学が学問的に未分化であり、現代的発想で考えるべきではないと留意を促した。すなわち、両者は同一の認識論的枠組みに則っており、哲学と歴史は共に「真実」ないし「真実らしさ」を求めるものであった。このことは同時に、他者への説得も含む。つまり、哲学と歴史は論争相手にいかに真実を感得させるかというゲームである（ゆえに、「真実」概念は「確実性」概念と結びつけられ、スピノザ『神学・政治論』や『百科全書』におけるデイドロ執筆項目「事実」等において盛んに議論されることになる）。このことは、第二の質問である読者の問題とも結びつく。『不平等起源論』においてルソーが学ある読者と普通の読者と区別していることから明確なように、ルソーは単なる社会批判の書として『不平等起源論』を書いたわけではない。この区別のなかに、淵田氏は当時の歴史叙述を巡る問題に対する戦略的意図をテキストのなかに読み取らねばならないと答えた。そして類型化の問題であるが、各フィロゾーフたちが古代に対して何を好んだのか、着目したのかということに関しては、比較的多くの研究が存在する。とはいえ、これらの研究の問題は彼らの主義主張にとって適当な歴史的過去を彼らが好むという発想である（ルソーであれば、彼の徳論から導かれるスパルタ賛美）。しかし、淵田氏の関心は、フィロゾーフたちがある歴史を選択する瞬間にそこにどのような論争が介在していたのかという論争的側面である。ゆえに、思想家を固定的に眼差そうとってしまう類型化の問題は慎重に議論されるべきであると淵田氏は主張した。

第二報告者上村氏は「理性と経験の間——建国期アメリカのブリテン国制史叙述をめぐって」と題して、建国者のなかでも合衆国憲法制定に影響を与えたジョン・ディキンソン、ジェイムズ・ウィルソン、アレクザンダー・ハミルトンの歴史叙述を、「なぜ歴史か?」「なんの歴史か?」の二つの問いから検討した。まず、従来「理性対経験」という構図で解釈されてきた建国者たちの歴史叙述の検討方法に異議を唱え、原理とその正当化としての歴史叙述という枠組みで彼らが思考していたことを明らかにした。次に、独立前に彼らが著したパンフレットにおけるブリテン国制史叙述をテキストに沿って検討し、原理においてはウィッグ的な原理を擁護したにも関わらず、その正当化としての歴史叙述においては君主権限の理解の対抗など、必ずしもウィッグ的とはいえない特徴があることを示した。

上村氏に対しては、討論者である上野氏が次の質問とコメントを行った。第一に、ウィッグ史観がロックに代表される社会契約の合理的モデルと結びつけられたのに対し、国制史叙述に注目するという本報告の方向性は、ポーコックやベイリンらの議論に親和的であるようにもみえる。ポーコックは **Machiavellian Moment** の（英革命に引き続く）最終章としてアメリカ独立革命を位置づけたが、こうした近世ヨーロッパの人文主義の潮流との関係を報告者は現時点でどう総括しているのか。第二に、報告では建国者たちの英国国制史の解釈はおおむねウィッグ的といえるものの、ハミルトンを筆頭にロイヤリスト的な要素

も思いの外大きく、それがウィッグ史観の見直しへと方向づけうるという見解も示されたように思われる。アメリカ建国史の文脈では独立派は共和派であることが半ば前提となつてウィッグが考えられるため、たしかにそのインパクトは大きいと推察される。だが本国の文脈で考えると、ウィッグはコートとカントリ（真正ウィッグが含まれる）を横断するし、ウィッグが君主権力を一定程度まで肯定するのは不思議ではない。とりわけ、フォーブズのいう懐疑的ウィッグ主義を念頭におけば、英国国制史において絶対主義王権の確立をもたらした肯定的影響を強調する立場についてもウィッグ的だと考えることは不可能ではないかもしれない（とりわけハミルトンは、政治科学の立役者として、不偏不党性を明確に担保しようとする科学的ウィッグ主義との親和性が高いようにも見受けられる）。

これに対して上村氏は、人文主義の系譜で語らなかつた理由として、共和主義、人文主義研究の深化と拡散に伴い、徒らに議論を拡散させる懸念があつたこと、今回取り上げた三者は、近代の政治原理によりコミットしているため、そちらを強調した、という二点をあげた。但し、マキアヴェッリ的な「第一原理」とウィルソンらの言う「第一原理」とはどのような関係に立つのかを考えることは、人文主義理解にとって有用である。また、どのような意味でウィッグ史観の見直しと言いつつ、アメリカ的な意味でウィッグは自由の擁護として捉えられ、その限りにおいて、強大な君主権限理解はウィッグ的ではないと、上村氏は回答した。また、他のウィッグの潮流、例えば懐疑的ウィッグとの関係においては、彼らの歴史叙述が不偏であるかは疑わしいとしつつ、一定の関係があることを認めた。

セッション後半では、フロアを交えて活発な議論がなされた。淵田氏に対しては、当時の科学アカデミーと碑文文芸アカデミーの間の対抗関係に着目すれば、むしろ後者の歴史叙述とルソーの関係が問題となるという点、ヘーゲル歴史哲学とフランスの人間精神史を同一視すべきではないという点について指摘があり、またその上でルソーとビュフォンの違いはどこにあるのかといったフランス啓蒙内部での問いかけがなされた。他方、淵田氏がポーコックの歴史叙述研究に対して距離を置き、フランス啓蒙のフィロゾフたちの哲学的歴史の語りを問題にしたのに対し、むしろポーコックの問題関心を正面から捉えてみるべきではないか、例えば『社会契約論』の古代ローマの民会やスパルタの扱いを歴史叙述研究の観点から取り上げるべきではないかという提案もあつた。

また上村氏に対しては、アメリカ建国期の歴史叙述が前提としていた理性か経験かという対立図式は、ニュートンを代表とする実験から得られる蓋然性を重視する立場とデカルト主義的な演繹重視の立場の対抗という同時代ヨーロッパの図式が参照になるのではないか、だとすればウィルソンはデカルト主義者として理解できるのか、さらに、今回扱われなかつた反独立派はどのような歴史を語つたのか、例えば独立派が人民の歴史／王の歴史を叙述したのに対し、反独立派が貴族の歴史を叙述するというようなことがありえるのか、といった質問が提起された。